

ワルラスとイスナール—経済学史における連続と断絶¹⁾

御崎 加代子

はじめに

A.N.イスナールの主著『富論 (*Traité des richesses*)』(1781)²⁾は、同時代人からはほとんど評価をうけなかったが、商品の交換価値を方程式によって数学的に表現した部分が、刊行後ほぼ100年たってから、ワルラスやジェヴォンズの注意をひきつけた。そのことがきっかけになって、20世紀の研究者たちは、イスナールを数理経済学者の先駆者として位置づけるようになった。さらにジャッフェが、ワルラスの一般均衡理論へのイスナールの影響を主張するようになり³⁾、イスナールは一般均衡理論の先駆者としても、評価を受けるようになった。

たしかに、イスナールの『富論』に展開され

ている議論は、ワルラスの『純粋経済学要論』の内容を彷彿とさせる部分が少なくない。両者の類似性を示すことにより、理論的な連続性を強調することは可能である。ワルラス自身も実際、イスナールの経済理論に高い評価をした。しかし果たしてワルラスがその理論形成過程において、イスナールから直接影響を受けたかどうかは、確証がない。

そこで本論文は、このような理論的視点から少し方向を変えて、イスナールの『富論』とワルラスの『純粋経済学要論』の思想的背景を探り、両者における連続と断絶とを明らかにすることによって、二人の経済思想の意義に、新しい光を投げかけることを目的とする。

かつてシュンペーターは『経済分析の歴史』(1954)において、一般均衡モデルを経済理論史における「マグナカルタ」と位置づけ、その形成過程としてのフランス経済学の伝統を語った⁴⁾。経済諸要素の相互依存関係を表現する数理的モデルの形成過程として、ケネーの経済表からワルラスの純粋経済学までの歴史をとらえ、それを貫く一直線上にイスナールもまた位置すると彼はみているのである⁵⁾。

しかし政策的な視点に注目してみると、イスナールの『富論』は、フランス革命前夜の危機的な状況の中で、フィジオクラートの経済学とそれが主張する税制度(土地単一税)を覆して、代替的な理論を示すことを意図して書かれている。それに対して、ワルラスは、フィジオクラートの土地単一税を称賛し、自らの社会経済学に

1) 本稿は、平成19-21年度に交付をうけた科学研究費補助金(基盤研究C)「ワルラスとフランスの経済学者たち—一般均衡理論の思想的起源の解明」の研究成果の一部である。本論文の最初のバージョンは、2008年5月24日経済学史学会第72回全国大会(於愛媛大学)で報告し、完成版を2009年7月30日に、滋賀大学経済学部 Economics Workshop 2009において報告した。また2009年9月24日には、ローザンヌ大学ワルラス=パレート研究所のセミナーで、本稿の英語版を報告した。報告当日に、貴重なコメントをいただいた方々にこの場を借りてお礼を申し上げる。

2) フルタイトルは、『富論—富一般の使用とその価値についての分析を含む。富の流通、その分配、貿易、貨幣の流通、税についての原理と自然法、フランスにおいて君主制の創始以来、公的あるいは私的な所有権がこうもってきた革命についての歴史的研究』である。稀観書である本書のテキストは、英訳とともに Van den Berg (2006)におさめられている。

3) Jaffé (1969)を参照のこと。

4) Schumpeter 1994 : 828

における土地国有化論との共通点を見出し、社会経済学の根拠として純粋経済学を構築した。この両者のフィジオクラートへの決定的なスタンスの違いは、二人が共有するとみなされる経済理論にどのように反映されているのか、これを明らかにするのが本論文のねらいである。

(1) イスナール『富論』研究史

イスナールの『富論』が、1878年にワルラスとジェヴォンズによって注目されるまで、この著作は、フィジオクラート批判の書として言及されても、その数学的部分が脚光をあびることはなかった。コックラン編『経済学辞典』(1854)におけるJ.A.Blanchi執筆によるイスナールの項目やMcCulloch(1845)などはその代表例としてあげられる。20世紀に入ると、René(1909)が、唯一の本格的なイスナールの体系的な研究書となるが、そこでも、数学的方程式の部分に特に重視されているわけではない。ジャッフエは、このような研究方向に批判的で、イスナールを一般均衡理論とワルラス経済学の

先駆者として位置づけようとした(Jaffé1969)。しかしジャッフエの解釈には、疑問も提出されている。Klotz(1994)によれば、イスナールのモデルは一般均衡分析や数理経済学の先駆と言えるかもしれないが、本人にその意図はなく、またワルラス自身がその純粋経済学の形成過程において、実際に彼から受けた影響は、父オーギュストを経由した可能性も含めて、皆無だといっているのである。しかし概して、イスナールを数理経済学の先駆者として位置づける解釈は、20世紀を通じて定着したと言える。このような状況のもと、フィジオクラート批判と言う、イスナールの経済学の本来の意図は、忘れられてしまったかのように思われる。

これに対して、2006年に刊行された、イスナールについての体系的な研究書 van den Berg(2006)は、イスナール研究史にとって新たな方向づけとなるものである。この本は、これまであまり知られていなかったイスナールの生涯についての詳細な記述に始まる。イスナールは、もともとエンジニア・エコノミストであった。彼の経済学はたしかに、土木学校で培った数学の能力なしには成立しなかったであろうが、その着想自体は、エンジニア・エコノミストの伝統の中に位置づけられるものでもなく、デュピュイのように他のエンジニアに影響を与えた形跡もない。著作の多くは、フィジオクラートの影響を受け、当時のフランスの税制度や貨幣制度の改革、風紀の改善といったものがテーマとなっている。彼の経済学を検討するにあたっては、フランス大革命という激動の社会背景、彼自身の社会改革プランなどを十分に考慮する必要があるというのが、この研究書のスタンスである。

主著『富論』も、1770年頃から交流がはじまったフィジオクラートの影響下で書かれたものであった。19世紀の研究者たちがイスナールの『富論』に言及するとき、それはフィジオクラート批判の書としてであったことから明らかなように、その交換方程式も本来はその文脈で理解

5) 「均衡の数学的定義とその命題の数学的証明を最初に試みたのは、イスナールであるが、経済学史においてレオン・ワルラスの先駆者として当然彼に与えられるべき地位を、まだかちとっていないのである。」(Schumpeter 1994: 217)

「さてカンティロンとケネーは、経済過程のあらゆる部門とあらゆる要素とが、一般的相互依存関係をもつという観念をもっていた。その中では一実際デュボンがそう表現したように一何物も孤立せず、すべては相互にかかわりあっているのである。そして彼らの独自の功績—ある程度までポワギルベールにもみられるが—は、のちにイスナールによって輪郭が描かれたような方法の可能性を認識することはなかったが、彼ら自身の方法で、つまり経済表の方法で、この観念を明示したことである。言い換えれば、経済過程の純粋理論を連立方程式の体系で表現する考えは、彼らのヴィジョンの外にあったが、彼らはこれを表という形で示したのである。ある意味では、この方法は初歩的であり厳格性を欠くものであるが、これはこの方法が歴史上の連続的な道行から外れ、また分析が歴史的には他の線に沿って到達した理由である。」(Schumpeter 1994: 242-243)

されるべきである。イスナールが意図したのは、農業部門だけが生産的であるというフィジオクラートの命題と、それを根拠にした土地単一税を否定することであった。剰余の源泉をすべての部門に一般化し、すべての部門において費用を上回る収入に税をかけることによって、公正で中立かつシンプルな税制度を実現することが彼の目標であった⁶⁾。

また、イスナールがたてた多数商品の交換方程式は、たしかに新しいスタイルではあるが、1760-70年代のフランスにおいては、かなり洗練された価値論争がすでになされており、イスナールはそこから着想を得たというのが van den Bergの解釈である。交換価値は内在的なものではなく、相互依存的、相対的なものであることを最初に発見したのはイスナールではない。そもそも当時のフランスにおいてはイギリスとはちがって、交換価値の決定要因を労働などの一元的要素に求めようとするという方向性は存在しなかった。それはフィジオクラートにおいても同様である。イスナールは、このようなフランスの価値論の特徴に、新しい形式を与えた人物だったというのである。

(2) イスナール『富論』の構造

本節では、以上のようなイスナール研究史の展開をふまえて、『富論』の内容をみてゆく。ジャッフェも指摘するように、イスナールの文章や議論の組み立て方は、決して明快とは言えず、混乱した部分も見受けられるが、その中で首尾一貫した主張をくみ取っていくのが、この節のねらいである。

(i) その意図

序論に示されているように、本書の意図は、同時代の多くの論者たちが支持していた社会契約説を否定して、社会の維持に必要な法が、人間の意志や社会における結合以前に存在することを主張し、その法の内容を明らかにすることである⁷⁾。このような彼のアプローチには、フィジオクラートの自然的秩序論との共通点を見出すことができる。同時に本書は、フィジオクラートの経済学説の批判から議論を始めている。イスナールによれば、彼らの誤りはつぎの4つの命題にある⁸⁾。

- ①農業は富の唯一の源泉である。
- ②インダストリイは、富を増加させない。
- ③税は、土地の生産物のみに課せられるべきである。
- ④君主は純生産物の共同所有者である。

その誤りの理由についてのイスナールのここでの説明は、独創的で興味深い。もしフィジオクラートが言うように、土地が富の唯一の源泉であれば、すべてのものを社会の成員間で平等に分配すれば事足りる。当然のことながら、イスナールはフィジオクラートの主張する合法的専制には反対である。イスナールによれば、富はインダストリイや労働によって増産可能であるという事実が、このような単純な社会の存立を不可能にする。人は最小の労働と最小の費用で、最大限のものを享受しようとするという傾向を持ち始めるからである。イスナールは、純生産物を生み出しえない富はないことを主張する。土地が生み出す富と、インダストリイが生み出す富がどのように価値を獲得し、それらの富がどのように交換されるのか、

6) van den Berg は、イスナールの経済理論が逆にフィジオクラートから影響を受けている部分をも示唆している。彼のアプローチは、フィジオクラートと同様に価値、再生産、剰余を出発点にしており、「経済表」と同じく、循環的で社会的なモデルを構築しようとしているという。

7) イスナールのルソーに対する痛烈な批判は、本書の他の部分にも見られる。

8) Isnard 1781: van den Berg 2006 : 71. 以下『富論』のテキストは、van den Berg (2006) 所収のものを使用し、参照ページもそれに対応する。

この二つの富の価値を相互間で比較することによって、それらの法則を明らかにするのが『富論』のねらいである。

(ii) 富の分類

イスナールは、富を「生産に使用される富」と「消費に使用される富」の2種類に分ける。一般的な富の増大のために、できるだけ多くの富を生産に向けるべきであるが、その際には、費用最小化の原則に従わねばならない。

すべての生産物のうち、生産に向けられる部分が生産費用にあたる部分となり、他の部分が「自由に処分可能」(disponible)な部分すなわち剰余となる。イスナールは、生活資料の生産、すなわち農業が、すべての生産物の源泉となりうるという理由で、農業の重要性を説き、「インダストリィは農業の娘」⁹⁾と表現している。土地の耕作を軽視すると、一国の繁栄は誤った方向に導かれることも指摘する。しかしこの農業重視は、フィジオクラートとは一線を画す。農業のみが純生産物を生み出すというフィジオクラートの主張を否定し、イスナールは、すべての富が、純生産物 (produit net) すなわち剰余を生み出すことを強調する。このことを示すのが、『富論』の最大の目的のひとつである。ここで注目すべきは、イスナールは、剰余を、費用を上回る生産物と定義し、まずは物量タームで示そうとしていることである。

(iii) 商品の交換方程式

『富論』の第1巻第2章「富の関係について」において、ワルラスによって取り上げられ有名になった、イスナールの交換方程式が登場する。

イスナールによれば、有用なものは異質な性質をもっている。異質なものの比較は、量や大きさによっては不可能である。その比較は、貨幣によって可能であるが、貨幣が存在しない場合も、交換は可能である。

二人が交換をする場合、一人目の剰余 (superflu) が、ある商品 M 単位の a 量、二人目の剰余が、もう一つの商品 M' 単位の b 量であり、それらが交換されるとする¹⁰⁾。

$$aM = bM'$$

その結果、M:M' は、 $\frac{1}{a}:\frac{1}{b}$ となり、各単位の価値は、交換される量の逆数比になる。

イスナールは、これを多数商品の場合に応用する。

一人目が、一つ目の商品 M 単位 a 量を、二人目が、二つ目の商品 M' 単位 b 量を、三人目が、三番目の商品 M'' 単位の c 量を交換する。

a 量は、am と an とに分けられ、それぞれ M' と M'' をうけとるのに、差し出される。同様に b 量は bp と bq とに分けられ、M と M'' をうけとるのに、差し出される。c 量は、cr と cs とに分けられ、それぞれ M と M' をうけとるのに、差し出される。

$$aM = pbM' + rcM''$$

$$bM' = maM + scM''$$

$$cM'' = qbM' + maM$$

$$M:M':M'' = \frac{r+p-pr}{a} : \frac{s+m-sm}{b} : \frac{n+q-nq}{c}$$

となり、各商品の価値の比を知ることができ。そしてこの点こそが、ワルラスが評価した点であった。

ここでイスナールは、ある商品の一つの単位を、ほかのすべての商品の共通の尺度とすることができることを指摘する。まさにワルラスの価値尺度財 (ニューメレール) と同じアイデアがここで示されているのである。しかしイスナールがここで主張しようとしたことは、もし貨幣がニューメレールとして使われるとすれば、それは、貨幣自体が価値をもっているからであって、

10) Van den Berg も指摘しているが (van den Berg 2006: 27), この M と M' はあいまいな概念であるが、イスナールは、2種類の商品の物量単位と考えている。ジャッフエは、これを商品 M と商品 M' の価値とみなしている (Jaffé 1969: Walker 1983: 62)

9) Ibid. 73

権力が恣意的に価値を与えるのではないということである。その文脈で、モンテスキューの貨幣数量説にも反論を展開している¹¹⁾。さらにここで稀少性が価値に与える影響についても言及し、ある物の価格は、それ自身の豊富さや稀少性のみならず、それらと関連をもつ他の生産物の豊富さや稀少性にも依存することを述べる。経済諸要素の相互依存性をイスナールがはっきりと認識していたことがうかがえ、ここにワルラス一般均衡理論の先駆者としての側面をみることができるが、イスナールの意図は、権力者の価格決定への恣意的な介入を否定することにあつたといえる。

イスナールは、これに続いて、労働の価値決定についても言及している。労働、サービスの機能は、他のどんな商品とも交換可能であり、したがって、それが商品の価値と同じ法則に従う¹²⁾。もし労働者の訓練や技能が同じであれば、ある一定期間の労働は同質であり、ある労働者の一定期間の労働の価値は、労働供給量総計を労働者の数で割ったのと同じになる。しかしこのようなケースは現実的ではなく、実際には、労働者の受け取る賃金は、様々である。この賃金は、他の商品の価格と同様、誰にも恣意的なコントロールはできないことをイスナールは指摘する。

(iv) 資本と利子率

イスナールは、すでにみたように、富を、「消費に使用されるもの」と「生産に使用されるもの」との二種類に区別する。その両方に適している財は、生産者と消費者の競争によって、どちらに振り分けられるかが決まる。後者には、継続的な使用が可能なのが含まれる。それは、自然が生み出した原料に、年々、有用な性質を付け加えることによって、有用なものを生産す

る。イスナールはこれを Richesses fonciers と呼ぶ¹³⁾。「foncier」には、「土地の」という意味があるが、イスナールがここで、例として挙げているのは、「作業場、店舗、納屋、風車小屋、工場、生産活動にあてられる船・車・動物、そして、機械、道具など」である。したがって van den berg が「fixed capital」という英訳をあてたように、「固定資本」あるいは「耐久財」として理解するのが適切であろう¹⁴⁾。これが生み出す年々の生産物は、他の商品と同じく交換価値を得る。そこからこれらの固定資本の価値決定を考えることができる。

固定資本の R 量から生産される有用な物の年々の価値を B とする。

その維持、代替のために必要な資本の価値を E とする。

B - E が、R の永続的な利子となる。

今、資本 (fonds) の価値と利子の比率を、 $x : I$ とすると、

$$x : I = R : B - E$$

これは、R と Y によって構成されている資本によって、生産物 B と B' が生み出され、それらの維持に、E と E' が必要な場合でも同じである。資本の利子率はしたがって、与えられた量によって決まる¹⁵⁾。

また固定資本は、利子率が均等するように、各部門に配分される。利子率が高いところへ、資本は流れ、均衡が確立し、価格に違いが生じると、また資本は移動し、均衡が再度確立すると考えられている。

ここで、

14) Jaffé も、この語が landed wealth ではなく、produced capital を意味していることに注意を促している。(Jaffé, op.cit. 57.) このような独特の語句使いが、イスナールを読みこなすことを一層困難にしていることはたしかである。

15) Isnard, op.cit. 114

11) Ibid. 105-111

12) Ibid. 111.

13) Ibid. 113.

農業で使用される資本の価値を F
 工業で使用される資本の価値を F'
 農業生産物の価値に対して与えられる供給
 総額 - 維持費等を B 、
 工業生産物の価値に対して与えられる供給
 総額 - 維持費等を B' とすると、

F と F' の比率は、 B と B' の比率に等しくならなければならない。なぜなら F と B 、 F' と B' の比率がひとしいからである。

このように、利子率の均等は、工業生産物と農業生産物の間だけでなく、すべての企業間で成立する。固定資本が増加すればするほど、供給額が同じだとすれば、利子は下落する。同時に、実際には、土地や貨幣の利子率が、さまざまな要因によって、他の利子率と乖離することも指摘されている。

(v) 生産方程式

「生産費用」についての節で、イスナールのフィジオクラート批判は、より明らかになってゆく。

今二つの商品が存在すると仮定する。一つ目の商品 $40M$ を生産するのに $10M + 10M'$ 、二つ目の商品 $60M'$ に、 $5M + 10M'$ がそれぞれ必要と仮定する。

費用として必要なのは、 $15M + 20M'$ なので、剰余の合計は、 $25M + 40M'$ である。実際に各生産者がそれぞれ、どれだけの収入を受け取るかを知るためには、これら二つの生産物の価値を決定しなければならない。

いま M'' を共通尺度とし、 $M = M''$ 、 $M' = 2M''$ とすると、

一つ目の商品の生産者は、 $30M$ あるいは $30M''$ の費用で、 $10M$ あるいは $10M''$ を自由処分可能な富として受け取る。

二つ目の商品の生産者は、 $12.5M'$ あるいは $25M''$ の費用で、 $47.5M'$ あるいは $95M''$ の剰余を受け取る。このように収入は、価値の変動により変化するのである。

このようにイスナールはここで、剰余あるいは純生産物をまずは、物量で表現し、それぞれの商品の価値を与えることによって、その大きさが決まることを示すのである。フィジオクラートを批判し、イスナールは次のように自らの主張を要約する¹⁶⁾。

1. 所有者たちの自由処分可能な収入(純生産物)の合計は、価値の変動にかかわらず、必要な生産物を使った後に自然が享受のために残す、自由処分可能な富の合計に等しい。
2. ある商品の増加がその商品の価値の減少を引き起こし、その商品の所有者の自由処分可能な富の減少を引き起こし、他者の富の増加をもたらす。しかし富全体に関して言えば、より生産的になっている。
3. ある生産物が自由処分可能な収入をその所有者にもたらさなくても、その活動が生産的でないとは結論できない、費用として使われたものを現実に生み出しているのだから。

またこれに引き続き、労働者について、イスナールは、その労働が生み出すものや有用な性質の所有者とみなすべきだとしている。労働者の生存に必要なものが、それらを生み出すのに必要な費用とみなせば、労働者も剰余を受け取る可能性はある。剰余を生み出すという点において、労働も資本も土地も同じなのである。工匠の労働が生産的でないとしたケネーやフィジオクラートとの決定的な違いがここにある。

イスナールは次のような方程式をたてた。

まず仕事 T をするのにある一定期間 300 人の労働が、仕事 T' をするのに同じく 600 人の労働が必要と、イスナールは仮定する。正確には、仕事 T を 300 人が行うと表現すべきであろう。い

16) Ibid. 119-121

17) Ibid. 123

ま生産物 P が 800, 生産物 P' が 1000, それぞれ所有されている。固定資本のかたまり N とし, それぞれの必要費用を次のように表現する¹⁷⁾。

$$\begin{aligned} 300T & : & 20T' & + & 100P & + & 20P' & + & 1/12N \\ 600T' & : & 10T & & & + & 40P & + & 200P' & + & 1/6N \\ 800P & : & 30T & + & 20T' & & & + & 100P' & + & 1/4N \\ 1000P' & : & 20T & + & 30T' & + & 60P & & & + & 1/2N \end{aligned}$$

N の維持更新費用:

$$\begin{aligned} 110T + 200T' + 300P + 90P' \text{ とすると,} \\ \text{これらの総費用は,} \\ 170T + 270T' + 500P + 410P' + N \end{aligned}$$

したがって剰余 (richesses disponible) は,

$$130T + 330T' + 300P + 590P'$$

剰余のうち, どれだけの部分が, 労働者, 生産物の所有者, 固定資本の所有者に得られるかということを決定するには, 労働, 生産物, 固定資本に価値を想定する必要がある。価値のさまざまな想定によって, それらの部分は変化する。あるときには, ゼロになることもある。しかしこれは, 一例にすぎず, フィジオクラートが言うように, まったく剰余を生産しない活動があるとは言えない。インダストリイや固定資本 (richesse foncier) の活動が「不妊的」だとは言えないことを, イスナールは, このような連立方程式によって強調する。

たとえば, A を共通尺度とし, $T=A$, $T'=2A$, $P=A$, $P'=3A$, $N=1200A$ と仮定する。

300T の価値は, 300A	費用は 300A
600T' の価値は, 1200A	費用は 850A
800P の価値は, 800A	費用は 670A
1000P' の価値は, 3000A	費用は 740A
N の価値は, 1200A	費用は 1080A

すべての富の総価値は, 6500A 総費用 3640A

ここで, T の所有者の剰余は 0
T' の所有者の剰余は 350A
P の所有者の剰余は 130A
P' の所有者の剰余は 2260A
N の所有者の剰余は 120A

イスナールがここで注意をうながすのは, 次の点である。T の所有者の剰余が 0 になるのは, 特殊なケースであり, 剰余を受け取るには, 無限の他の仮定をすることができ。このような価値理論をもって, イスナールは, 税はすべての富 (総量ではなく剰余) に比例的にかけられるべきだという根拠にしたのである。

(3) イスナールからレオン・ワルラスは影響をうけたか

以上のようなイスナールの経済学から, レオン・ワルラスは影響をうけたのであろうか。ワルラスがイスナールに直接言及したのは, 1878 年にジェヴォンズと一緒に数理経済学の先駆者たちのリスト¹⁸⁾を作成した際のみである。それ以外の著作には, ジャッフエも指摘するように, イスナールへの言及は一切ない。これは父親のオーギュストについてもあてはまる。ジェヴォンズが『経済学の理論』の第 2 版に付け加えるために作成したリストに, イスナールを付け加えたのはワルラスである。それは, 1878 年 12 月に『ジュルナル・デ・ゼコノミスト』に掲載された。

「特に冒頭に, 1781 年に公刊されたイスナールの著作を記入したのは, われわれである。その最初のページから, きわめて正確に, 価値の比率が交換される商品量の逆数に等しいとして, 代数記号で表現されている。

この交換方程式は, この著者によって深く掘り下げられたり, 深められたりすることはな

18) Bibliographie des ouvrages relatifs à l'application des mathématiques à l'économie politique.

かったが、やはり社会的富の科学的理論の出発点である。そしてそれは、ある限界はあるが、やはり純粋経済学を数理科学にしたてるのにじゅうぶんであることには変わらない」¹⁹⁾

イスナールが交換方程式において、効用を一切言及しなかったのとは対照的に、ワルラスは、稀少性(限界効用)の比として、交換価値を表現した。この点が、ワルラスの大きな貢献であるが、富の分類、連立方程式の使用、価値尺度財の採用、純収入率の価格決定など、その他の多くの分析道具を両者が共有するのは、たしかである²⁰⁾。

しかしながらワルラスが一般均衡理論を構築する際に、イスナールの方程式に影響を受けたか否かについては、実はジャッフェ自身も認めているとおおり、明白な証拠はない²¹⁾。ジャッフェの言うように、ワルラスの蔵書には、このイスナールの『富論』が含まれる²²⁾ので、この著書の存在を、自らの純粋経済学に取りかかる以前から知っていた可能性はある。現在ローザンヌ大学が所蔵しているワルラスの蔵書(ワルラス文庫)を直接確認したが、イスナールの『富論』には、方程式が展開されている頁も含めて、一切書き込みがなく、非常に保存状態がよかった。他の蔵書と比較しても、少なくともこの蔵書からは、ワルラスが『富論』に一生懸命とりくんだという形跡を感じ取ることはできなかった。

では、両者の経済学の決定的相違点に目を移してみよう。既にみたように、イスナールの連立方程式の意図は、土地以外の富が剰余を生み出

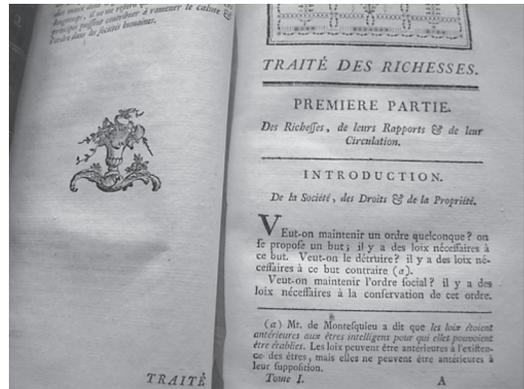


写真1 ローザンヌ大学ワルラス文庫所蔵 イスナール『富論』

す可能性を示すことであり、税はその剰余部分に課せられるべきことを主張することであった。そこでは、労働者も費用すなわち生存水準以上の賃金を受け取る可能性がしめされており、当然のことながら、税は、このような賃金にもかされるべきというのがイスナールの主張である。

それに対して、オーギュストとレオン・ワルラス父子は、稀少性価値理論に基づき社会がどのような状況にあっても(人口増加と資本蓄積がすすんでも衰退しても)、労働者の受け取る賃金は、つねに一定であることを理由に、労賃の免税を主張する。また社会が進歩すれば、利子率は低下し、資本家の地位も低下し、地代と地価の上昇により、得をするのは地主だけであることから、条件の平等を確保するために、土地の国有化を主張した。これにより、地代が国庫収入となれば、労賃のみならず、すべての税を廃止することができる。

この進歩する社会の三階級の分配法則の証明こそが、レオン・ワルラスの純粋経済学設立の目的である。

「進歩する社会においては、労働の価格すなわち賃金は目立って変化せず、土地用役の価格すなわち地代は目立って上昇し、資本用役の価格すなわち利子は目立って下落する。……進歩

19) Walras, L. 1993 : 613.

20) スラッファへの影響も考慮して当然であろうが、スラッファの『商品による商品の生産』にもイスナールについての言及はない。

21) Jaffé : 1969 : Walker 1983 : 62 ジャッフェは、ワルラスは父以外の誰かに恩を受けていることをみとめることをいやがったからだとしている。

22) ワルラス文庫の目録は、Walras, L. (2005) に収められている。

23) Walras, L. 1988 : 597

する社会においては、純収入率は、目立って下落する。」²³⁾

土地国有化とそれに伴う税制の撤廃を最初に主張したオーギュストは、イスナールが批判的としていた、フィジオクラートの土地単一税を高く評価していた。このオーギュストの主張は、レオン・ワルラスの社会経済学として結実した。息子のレオン同様、オーギュストの文献にも、イスナールへの直接的な言及はないが、ワルラス父子のフィジオクラート観を知ることは、イスナールと彼らとの違いを知る上で有益であろう。

結論：ワルラス父子のフィジオクラート観から示されるイスナールとの決定的違い

父オーギュストは「税の廃止について」（1830）という論文²⁴⁾の中ですでに、土地の国有化とそれにとまなうすべての税制の廃止という、それ以降のワルラス父子の柱となる思想を展開している。そこで彼は、自らの主張とフィジオクラートの土地単一税の思想との一致を強調している。両者の違いはつぎの二点であるという。

第一点目は、オーギュストが、地代収入は、君主が受け取るのではなく、すべて国庫収入に当てられることを主張している点、第二点目は、オーギュストが、すべての富が土地から生まれるという命題を否定し、インダストリイもまた富を生み出すということを主張している点である。

オーギュスト・ワルラスは、農業生産物に偏ったフィジオクラートの富観にたしかに批判的であるが、アダム・スミスによる批判とは一線を画している。オーギュストは、土地の生産物のみを富としたフィジオクラートを批判するが、労働生産物のみを富としたアダム・スミスに対しても同じように批判するのである。

スミスとケネーは結合されるべきだと、オー

ギュストは言う²⁵⁾。土地と労働は、二つの根源的な富だからである。土地の価値があるとすれば、それは稀少性を持つからであり、土地と労働はともに稀少な効用を生み出すのである。イギリス古典派やマルクスとは違い、オーギュストにとって、ケネーの富観はスミスによって乗り越えられたのではなく、二人の考え方は同列に扱われるべきものなのである。土地と、労働・インダストリイは、同列の富であり、それらは共同して生産に寄与する。富の価値を労働のみに還元することはできない。

オーギュストは、このようにフィジオクラートとアダム・スミスの富観を統合することによって、自らの新しい経済学の構築が可能になると考えていた。交換価値の理論〔純粹経済学〕は、この二つの富を、同次元で扱うものである。しかし、そのことが、二つの富を全く同質のものに還元して扱うことを意味しているのではない。この点は、フィジオクラート批判のために、両者の共通点〔剰余を生み出す〕を強調しようとしたイスナールとワルラス父子の決定的な議論の方向性の違いであろう。

このようなオーギュストの主張は、レオン・ワルラスの処女作『経済学と正義』（1860）に受け継がれた。彼は古典派経済学の価値理論を次のように批判する。

「誰も創造に参加しない富が存在する。自然的富を知らなければならないのである。価値を持つ多様で多数のものの中で、あるものは人間の労働の助けなしに、自然によってわれわれに与えられた。また他のものは、労働の成果すなわち、我々の能力から生じる労働を、自然の無償の贈り物に適用することによって与えられた。

したがって、自然的富と生産的富が存在するのである。アダム・スミス、リカード、J.B.セーやガルニエ氏が述べたように、富はまず生産され、そして分配され……というような一般の方

24) Walras, A.1990.

25) Ibid. 173.

26) Walras, L. 2001:154

法で述べると、科学の領域から最も重要な価値の範疇を、除去してしまうように思われる。」²⁶⁾

このような価値論においては、土地自体に固有の価値があることが認められず、その結果、土地を個人の私有に帰着させてしまったとワルラスは主張する。

実は、この富観は、ワルラス父子の社会観と密接な関係がある。彼らによれば、社会を構成するのは個人のみではない。国家(あるいは共同体)と個人という二つの範疇が、社会には存在する。社会は単なる個人の集計には還元されないというのがワルラス父子の議論の前提であり、そういう点で、彼らもまた反社会契約論の立場をとるのである。

さて純粋経済学を完成したワルラスは、一般均衡モデルによって生産用役の価格決定を説明した。彼の意図は、土地そのものが価値を持つことを認め、地代を、賃金や利子と同じ次元におき、同じ原理で説明することにあつた。地代の存在は、それを受け取るべき国家(あるいは共同体)の存在理由でもある。彼は、死の前年ローザンヌ大学での記念講演で、土地国有化と税制廃止を扱う「社会経済学」の役割について次のように説明している。

「あらゆる学派のエコノミストたちの観点とは逆に、現実の人間は、社会においてのみ、そして社会によってのみ存在するのだということを確立することによって、道徳的基盤を与えるのが道徳哲学です。個人と国家という、抽象的だがともに自然的な二つの社会的類型が存在することになり、それらが富の分配における受取人として認められることになります。そしてそれゆえに、社会的正義が、土地は国家に帰属させ、人的能力は個人に帰属させることを求めていることは明らかです。所有と税という二つの問題は、このようにして同時に解決されるのです。」²⁷⁾

このような社会認識は、ワルラス経済学を自由放任学派と分かつ重要な点であるが、ここには、リカードの価値論や地代論を頂点とするイギリス古典派を批判する意図もよみとることができる。

「前者(満足しきった保守主義者)は、社会が全く改革される必要がないと考えるもっともな理由をたくさん持っていました。彼らは、社会問題をたくみに避けたり、はぐらかしたりすることをもっぱら任務とする科学を、教えたり教えさせたり、それに補助金を与えたり奨励したりしています。これが官製の学問です。最近までそれは土地に価値があるということを大胆に否定し、個人こそが唯一の社会的存在形式だとはっきり主張していました。そうしておいて、官製の学問は、すべての富を個人的所有に委ねるでしょう。それは単純で決定的なことでした。」²⁸⁾

一般均衡理論的な枠組みによって、イスナールが意図したことは、土地も資本も人的能力の、同じく剰余を生み出す可能性があるということを示すことであつた。ワルラスは逆に、同じアプローチによって、土地のみが持つ特殊性を示そうとした。前者は、フィジオクラートの土地単一税を批判するために経済理論を構築し、後者は、社会の進歩にともなう土地の稀少性の上昇、それがもたらす地価と地代の上昇を示し、あくまでも土地の特殊性を主張するという点で、フィジオクラートと共通点を持つ。

このように、ワルラスとイスナールの富観やそれに基づく社会ヴィジョンや政策的意図における決定的違いは、一般均衡理論の形成過程の一部として両者の経済理論を比較検討するだけでは、決して明らかにはできない。両者における連続と断絶を明らかにしてこそ、ワルラス経済学の思想的意義をより明確にし、一般均衡理

27) Walras, L.1987: 508-509

28) Ibid. 512.

論の思想的起源に新しい光を投げかけることができるのである。

参考文献

1. Blanqui, J. A. (1854): « Isnard » in C. Coquelin and G.-U. Guillaumin *Dictionnaire de l'économie politique*, Paris, Guillaumin, I .
2. Boven, P. (1912): *Les applications mathématiques à l'économie politique*, Lausanne, F. Rouge.
3. Bousquet, G.H. (1958): « Histoire de l'économie mathématique jusqu'à Cournot », *Metroeconomica*, X .
4. Hebert, R.F. (1987): "A. N. Isnard", *The New Palgrave*, London, Macmillan.
5. Isnard, A.N. (1781): *Traité des richesses*, Lausanne, François Grasset et comp. Imprimeurs & Libraires. (ローザンヌ大学ワルラス文庫)
6. Jaffé, W. (ed.) (1965): *Correspondence of Léon Walras and related papers*, 3 vols, Amsterdam, North-Holland Publishing Company.
7. Jaffé, W. (1969): "A. N. Isnard, Progenitor of the Walrasian General Equilibrium Model", *History of Political Economy*, 1, Spring, in Walker, D. A. (ed.) (1983): *William, Jaffé's Essays on Walras*, Cambridge University Press, Cambridge, New York, Melbourne.
8. Klotz, G. (1994): « Achille Nicolas Isnard, precursor de Léon Walras? », *Économies et Société*, 20-1, 10-11.
9. McCulloch, J.R. (1845): *The Literature of Political Economy, A Classified Catalogue of Select Publications in the Different Department of That Science with Historical, Critical, and Biographical Notices, Reprint of Economics Classics*, New York, Augustus M.Kelly, 1964.
10. Moret, J. (1915): *L'emploi des mathématiques en économie politique*, Paris, M.Giard & E.Brière.
11. Renevier, L. (1909): *Les Théories Économiques d'Achille –Nicolas Isnard* (Thèse pour le doctorat), Poitiers, Société Française d'imprimerie et de librairie.
12. Robertson, R.M. (1949): "Mathematical Economics before Cournot", *The Journal of Political Economy*, vol. L VII.
13. Salvat, C. (2004): « L'ambivalence de la référence physiocratique chez Walras », in Branzini, R. et al (eds.), *L'Études Walrassiennes*, Paris, L'Harmattan.
14. Schumpeter, J.A. (1994): *History of Economics Analysis, with a new introduction by Mark Perlman*, New York, Oxford University Press.
15. Sraffa, P. (1960): *Production of Commodities by Means of Commodities*, Cambridge (菱山泉 他訳『商品の商品による生産』)有斐閣 1962年)
16. Theocharis, R.D. (1983): *Early Developments in mathematical economics*, the second edition, Philadelphia, Porcupine Press.
17. Van den Berg, R. (2006): *At the Origins of Mathematical Economics: The Economics of A.N.Isnard (1748-1803)*, London & New York, Routledge.
18. Walras, A. (1990): *Richesse, liberté et société, (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. I), Paris, Economica.
19. Walras, A. (1997): *La vérité sociale, (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. II), Paris, Economica .
20. Walras, A. (2005): *Correspondance, (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. IV), Paris, Economica .
21. Walras, L. (1987): *Mélanges d'économie politique et sociale (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. VII), Paris, Economica.
22. Walras, L. (1988): *Éléments d'économie politique pure, ou théorie de la richesse sociale (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. VIII), Paris, Economica.
23. Walras, L. (1990a): *Études d'économie sociale : théorie de la répartition de la richesse sociale (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. IX), Paris, Economica.
24. Walras, L. (1990b): *Les associations populaires coopératives (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. VI), Paris, Economica.
25. Walras, L. (1992): *Études d'économie politique appliquée : théorie de la production de la richesse sociale (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. X), Paris, Economica.
26. Walras, L. (1993): *Théorie mathématique de la richesse sociale et autres écrits d'économie pure (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. X I), Paris, Economica.
27. Walras, L. (1996): *Cours (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. X II), Paris, Economica.
28. Walras, L. (2000): *Œuvres Diverses (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. X III), Paris, Economica .
29. Walras, L. (2001): *L'économie politique et la justice, (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. V), Paris, Economica.
30. Walras, L. (2005): *Tables et Index, (Auguste et Léon Walras, œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. X IV), Paris, Economica.

Walras and Isnard: Continuity and Discontinuity in the History of Economic Thought

Kayoko MISAKI

A.N. Isnard (1748-1803)'s main work, *Traité des Richesse* (1781) was almost ignored by his contemporaries. After 100 years, however, this book attracted Walras and Jevons's attention by its mathematical analysis of the exchange values of commodities. In the twentieth century, Isnard came to be regarded as a pioneer of mathematical economics. William Jaffé emphasized his influence on Walras and insisted that Isnard was a precursor of general equilibrium theory.

This paper aims to examine the relationship between Walras and Isnard from a different perspective and to shed a new light on the origin of Walras's general equilibrium theory. In his *History of Economic Analysis*, Schumpeter referred to the French tradition as a theoretical origin of general equilibrium model and connected Quesnay, Isnard and Walras. However, there is no evidence that Walras was influenced by Isnard in the formation process of his pure economics. We checked the copies of *Traité des Richesse* in possession of Walras which are preserved at Lausanne University and could not find any evidence, either.

Originally, Isnard's book was dedicated to analyze the fiscal and monetary system under the Ancien Régime and to propose new policies. His aim was to deny the economic theory and policy of Quesnay. On the other hand, Léon Walras and his father Auguste hold Quesnay in high esteem as the founder of pure economics and advocate of the single tax. To examine their attitudes towards Physiocrats will help us to show the continuity and discontinuity of their economic analyses and social visions. It will lead us to clarify the formation process of Walras's general equilibrium model from a new perspective and the originality and significance of his economic thought.